

八戸三社大祭は二十日から 山車二十五台がケンを競う



八戸三社大祭はことしも八月二十日から二十三日までの四日間けんらん豪華な夏祭りとして八戸市内で開かれる。

八戸藩らしい二百五十年余の格調と格式の高さを誇る伝統を受けつぎ、新羅神社、法霊神社、神明宮の三社の御輿と各町内の山車の合同運行がくりひろげる絵巻は正しく八戸ならではののみものである。

ことしの山車組は昨年と同じく二十五台が参加。二十日は前夜祭で、十六日町と二十六日町を会場に山車の予備審査とおはやし競演会が行なわれる。二十一日のお通りはみこしと山車の合同運行。中日の二十二日は山車の自由運行や長者山での騎馬打毬があり、二十三日のお還りには再びみこしと山車の合同運行が行われる。また「はちの（港まつりも）二十一日から三日間並行して行われ、八戸市は海陸あげての夏祭りで行われ立つ。

民衆の呼吸・1000年のうねり 解説三社大祭



一八〇〇年代の古来山車

津軽のねぶたに対して南部の祭は、8月21日から3日間行われる三社大祭であろう。そこには津軽の歌と南部の踊りに対照された民衆の生活のうたいあげがある。山車のつくりも豪壮と優美に比較されるが、ねぶたがはちのへ祭の足もとも及ばないのは、三社大祭は北奥羽に展開される民俗舞踊の集大成であるというところである。それは単なる伝承ではなく八戸をかたちづつた約千年の民衆の遺産が、延々2キロにわたる行列の中に再現され、まのあたりみることができるところである。

南部神楽、大神楽、鶏舞、駒踊り、虎舞い、手踊り、願人、昔ながらの武者押、稚子行列もあり、ことに法霊様の南部神楽の獅子頭が10幾つも並んで、揃ってガックガックと歯打ちをするさまは、まさに圧巻である。そこからは音楽と踊りの発生を思わせる、遠い三社大祭の誕生が波のよりにねりかえってくる。

この祭礼が長者山を御旅行所として法霊神社から出たのは享保6年（1721）それに新羅神社が同調し、明治22年神明宮を加えて三社祭となったが、いまのように民衆の唄と踊りが参加したのは八戸に野村軍記と大沢多門という偉才がいたからである。野村は八戸藩の名を天下にたかめるために、花形力士を藩のお抱えとし、江戸の相撲番付の出身地を大関以下殆ど八戸にゆりかえたので、江戸の人々は日本にはじめて八戸藩があったことを知ったという。

明治に入り大沢多門が神輿や旗幟などの奇進を得ていっそう生彩を整えたが、まだ土農工商という意識が

あった時代、このカベをのり越え武士も百姓もみのりの秋を祝ったこのような姿は、まさに日本唯一のものであり、それは天明キキで人口の半数を失った経験から、豊年を感謝する素朴な心の触れ合いと解すべきであろう。

映画「黒いオルフェ」で知られるあのリオの祭りの熱狂的な民衆の私たちは、自由への景慕とインターナショナルという意識と色彩こそ豊かだが、それ以前の自然に対する歓喜の人間のかたちをこれほど総集大成した祭は日本には珍しいのではないだろうか。

半月位前から山車作りがはじまり、子供たちの祭太鼓の稽古の音は遠く響き、楽しい八戸の夏の風物詩となっている。

山車について

三社祭の山車には、八戸という風土の中に育った独特の構図がみられる。

波をふんだんに使った波だし——細身の竹に銀をまきつけ、その先に銀の玉をつける。甲欄のもの——手すりをめがけして、かざりつけするもの、建て物——お宮とか門がつく建築もの、山付き——岩とか小山とかを土台としたもの、などが数えられる。

山車づくりの人々は、一つの主題がきまると下絵を何枚もかき、その限られた空間を最大限に利用する点と、色彩や視角を苦心してつくっている。山車づくりの技法は、祭の様式が京都祇園祭の流れであるところから、京都から伝わったものと考え

られがちだが、これらは、八戸で山車が曳かれるようになった明治20年代から、考え、工夫してつみ重ねた誇るべき技法なのだ。

山車の主題もまた時代とともにうつきかわってきた。大正年間までは、絵画美の歌舞伎もの、勇壮な軍記もの、忠孝の美談ものが殆どであったが、大正に入ってから、映画の黄金時代を反映して「丹下左膳」とか「鞍馬天狗」、終戦を境として、忠孝ものがすたれて、明るい童謡や民謡の世界、舞踊などから取材したものが現われてきた。だがなんといいても多いのは、歌舞伎18番の出し物である。「不破」「鳴神」「暫」「不動」「勧進帳」「助六」「矢の根」「毛抜」など、人形の隈取り（くまどり）もあざやかな、殺陣や見得の胸のすくような名場面が必ずみられる。

山車の主題の中心をなすものは、やはりお化けものであろうか。オロチ退治、頼光、岩見重太郎のヒヒ退治、鍋島の化け猫など。八戸の山車は人形だけでなく、あらゆる動物とか、怪獣が登場させ、リアルに、あるいはオブジェとして、その表現の可能性をギリギリいっばいに追究している。そこに山車づくりの技術的な成長のヒミツがありそだ。最近、その流れが竹取物語、孫悟空、魚籃観音、浦島太郎などという幻想ものの新しいジャンルを開拓してきた。

また、人形の見送りもほ、えまじいものである。例えば桃太郎の鬼退治なら、見送りが、彼が桃から生まれるところ、という具合に楽しい工夫がみられる。

経済の高度成長にはいった40年代、

昭和41年から20日に前夜祭が行なわれることになり、各町内の山車約20台が午後3時運行を開始し、午後6時市庁横及び馬場町通りに集り、子備審査をうけるが、山車が一堂に会する光景は、ただ、豪華ケンランという一言につきる。

むかしの山車は豪商が出し、飾りたてた人形を台の上に載せ、店方の若者たちがそれを担いで掛声勇ましく練り歩いた。当時の美濃屋の神功皇后、近江屋の太公望、和泉屋の武内宿弥などの人形が、いまも残っている。

祭ばやし 祭ばやしは、優雅な祇園ばやしであるが、これも風土化した独特の味わいがある。大人の太鼓が一人、子供たちの小鼓が五人、それに笛、山車の運行の足は遅く、だからメロデーも優長に甘く響き、祝儀をもらおうと、

ことしア世が良うて、三社大祭——と、木遣や綱曳音頭をやる。

祭ばやしは、山車曳きが遅かったので、きわめて若いのだが、南部木遣音頭などの影響があり、それに古くから伝わった神楽などの演奏法と、八戸の成長のリズムが生かされているといっばいいいだろう。



三社大祭の山車は八戸の市民が一世紀にわたってつくりあげた民衆の芸術品といえるでしょう。その原型が京都の紙園祭の「山鉾」だったので、自由な八戸人の気質が、山鉾がもつ意味の神社―権威の表徴に対して、日本人の底辺にひろがる奥床しいところの賛歌となっています。その点三社大祭は辺境の町八戸にひらかれた美しいフロンティアの祭りといっていいいでしょう。

⑤ 駅通り旧八戸県税務所（現日本生命ビル）S 27



⑥ 三日町大通りS 30年



⑦ 寺横町通りS 30年（三日町現在の中央ビル付近）S 30年



20年代

S 27年 岩見重太郎（六日町）S 26年1位



里見八伏伝 芳流園の場（頼家）S 30年



20年代末に入り経済の回復と共に山車も本調子に乗ってきた。この時代まだ戦前の山車づくりの名人たちが生きており 彼たちの青春時代の思い出の名場面が、新しい映画の手伝をとり入れて登場した。

孫悟空（上組町）S 43年



亡霊知盛（十一日町）S 32年1位十八日町通り

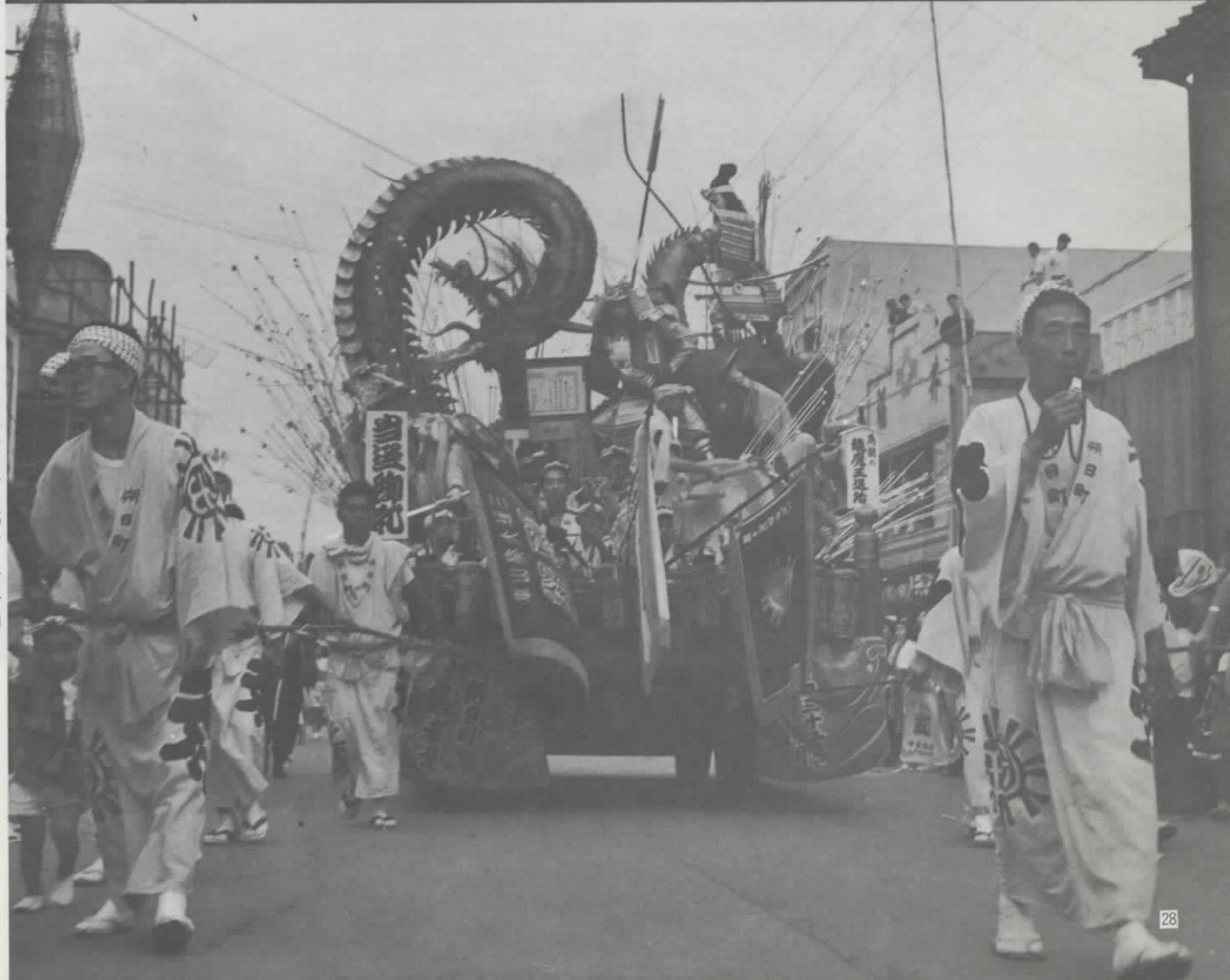


30年代

さるかに合戦（吹上）S 43年



為朝の魔王退治（朔日）S 35年 八日町通り



30年代、40年代初めにかけて、戦後の民主教育の成果としてのヒューマンイズムが「山車の本質が、いつまでも義理人情の世界であっていいのか」という新しい課題を提起する。これに応じて童話に取材した数々の名作が登場 和井田登撮影



鯨とり(六日町) S48年秀作



大江山魔人(青年会議所) S46年

40年代



南部師行公出陣の場(吹上) S51年



会津飯盛山白虎隊二十士(頼家) S47年一位

経済の高度成長にはいった40年代、山車に発泡スチロールを使った新しい山車づくりがお目見得した。そのいっそうリアルに美しい精彩な製法は山車革命といえるだろう。また歴史ブームに乗って八戸の歴史から取材した郷土の人物も登場してきた。



新め組の喧嘩(塩町) S52年一位



孫悟空(城下) S51年少女の笛吹の隊が目目された。

50年代に入ると山車は完成期を迎えるが、山車の劇的なシーンをさらに増やそうと、新しい工夫が大胆に試みられている。例えば52年の塩町の新め組の喧嘩ではマトエなどの小道具を曳き手の間に入れて、山車のもつテーマをいっそう盛り上げた。これは山車づくりの未来性を指向するものであり、その表現力と芸術性が無限大であることを物語っている。



50年代

山車のテーマを拡大するマトエ。S52年鍛冶町通り

ゆかたがけの山車鑑賞講座

祭りだから楽しんで見ること
審査では厳格な総合評価が……

二科会会員 石橋 宏一郎

- ㊦ 豪華けんらんの極み、塩町の「連獅子」
(51年度最優秀賞)
- ㊧ ワイド立体時代の先がけとなった類
家町内の「赤穂浪士討入」
- ㊨ 後見も主題を表現し前面と全くひけ
をとらない。(46年度最優秀賞)

私の父が大正時代から十一日町の山車を作っていたのが、私も少年の頃からこの手伝いをし、そして山車を引いて大きくなったので、人後に落ちない祭りバカの一人だと思っています。

その私が戦後になって、山車の審査委員に引っぱり出され、二十何年もやってきましたが、審査員の立場から山車の見方の正攻法などというものを話すのでは全然面白くはありません。やはりお祭りの山車は、楽しんで見るといい。語に尽きると思っています。その事を中心として、山車の見方あれこれを話してみたいと思います。

最近の山車は本当に豪華絢爛という形容がぴったりで、昔の山車の事を考えたら全く今の昔の感がします。戦後、どのあたりからこのように変わってきたかと申しますと、山車に動きが加わってからのことだと思います。動きが加わってからの山車は人形が舞台に固定されて動かぬもの、というのが常識でしたがそれが昭和四十六年になって類家町内の出した「赤穂浪士討入」が回り舞台を取り入れ仕掛けを入れて「動」の変化を見せました。これは山車の歴史では革命的な出来事でしょう。この山車は同年の第一位となりましたが、それ以来これに刺激されていっせいに動きが入るようになりました。そのあと塩町の山車が第二回の革新的なころみを探り入れました。塩町では類家のやり方を模倣しないで、新たに両側に引き出しをとりつけました。そして立体化と大型化と動きの三要素をいっぺんに表現しました。五十年の最優秀賞になった「連獅子」がそれですが、このあとご承知のような超大作群の出現となったわけです。

芸術と関係のない素人のひとがこれほど立派なものを作るようになって本当にびっくりさせられます。八戸三社祭の山車は日本中に誇れるすばらしい文化財だと思います。

そこで山車を見て楽しむ、ということは、立体、大型、動き—つまり豪華絢爛であってさらに重厚で、娯楽性があれば云うことがないということになります。そうなりますと山車のほとんどが楽しくて、良いことになりま。そこで審査員が登場するのですが、審査というのはこれはしんどい仕事でして、最優秀賞に入った町内以外の全町内からうまれるといって役割りを背負わされています。

審査のネライは総合的に良くないとダメ、ということになりますので、前に申しました要素のほかにも沢山のものを見てゆきます。色彩、配置、調和、史実といったものから人形のデッサンがしっかりしているか、とくに目がきまっているか、山車の主題に合ったつくりをしているか、人形は沢山出てくるかどれが主役かワキ役なのか(出る人形をみんな

主役にしてしまつて外題の解釈に苦しむことがあります)山車の後のつくりである「後見」—うしろみ—が山車の主題を表現している部分と関係があるか、補足しているか、といったことなどです。

三社祭の山車は、歌舞伎と童話と地方の物語に題材をとっていますが、新しいアイデアはどんどん採り入れるべきだと考えます。伝統を守ることがもちろん大切ですが、古い型を守っているばかりでは進歩がないと思えます。審査員もそのところを見てやらなければいけないと思います。

ただどんなアイデアが入っても良いのですが、よその祭りの(例えば京都などの)マネはしないことです。青森のネブタの様式を八戸の山車にとり入れたらどんなことになるでしょう。ネブタ祭に八戸の山車が入ったとしたら……こう考えるとこのことはすぐ解ります。

八戸三社祭の山車は全国に誇り得るものです。その独自性を守ってゆきたいものです。



山車づくり 類家孝

塩町・最優秀賞4連覇へ 燃えてる男



塩町・類家孝さん(三三三)の巻
処女作が準優勝に

類家さんが生まれ育った八戸市塩町の町内の山車を手がけることになったのは十年前、二十四才の時だ。

それまで町内の山車作りをしていた父親の幸之助さんが引退したあと、町内有志たちが

「今年からお前やれ」

いきなり指名してきた。ヤブから棒の話に類家さんはびっくり。

「何へ(云)ってる。おれ山車など作れるわけねえべ」

「名人の親父の跡ついでお前やんだ」

と有無を云わせなかった。

お前の好きなように、思ったように自由にやってみると云うのである。それが何故か心に残った。

類家さんは幼年時代から家の隣りに山車小屋がかかって、夏になると寝ないで山車作りをみていた。「人形の位置をもっと上げる」

「この建物はもう少し後へ下げろ」そんな話を夢うつつに聞いて育った。学校に入っても休みの工作の宿題はいつも祭りの山車をつくった。自分で曳いて歩いた町内の山車を見ては、おれならあすこをこう作るーなどと生意気なことを考えていた。

教科書通りでなくて良いと云うんなら、一丁やってみるか！それでハラが決まった。

こうして昭和四十五年塩町町内から出された山車が「里見八犬伝」だった。外題は伝統を踏んだものだが、作風はすごく変っていた。建物の鬼互(おにがわら)には鬼の代りにハンニヤの顔が入っていた。主役の人形のおきから雁(かり)が飛び立つのが雲とともに中天にのびている。主役を思い切り強調する代りに傍役を盛沢山にした。

「ポイントをしっかりとつかまえて、のびのびと表現した」というのが審査評で、いきなり準優勝に入った。同町内では実に十九年振りの事でわき返った。しかし父親の幸之助さんは山車の出来ばえについては何も云わなかった。それが類家さんには妙に恥かかった。この年の最優秀賞は隣り町内の類家町であった。

翌年は「常盤御前」だったが、ヨロイカブトに大刀をはいた武者人形をみたある審査員に「追手が金のカブトをつけるか？」と云われ、史実ものは二度と手がけまいと考えた。長老のはげまし

そんな時町内の長老の菊田重次郎さん(現市議重一郎さんの父)が「塩町は消防の家元だから、消防ものをとり上げてみるお前ならきつとやれる」と云ってくれた。菊田さんはその時中風で寝ていたが、「必ず一等とるから元気で見てくれ」と逆にはげましてやった。この時から隣町の類家町の存在が大きく意識の中に入ってきた。類家町は三十八年の「かぐや姫」から連続七年最優秀賞を獲得してきた。そして一年置いてそのあとも二連勝だ。

この宿敵を抜かなければ優勝旗を手にすることは不可能だ。類家は大町内である。金の面でも恵まれている。塩町が山車の製作費をまともに使えるのは四年に一べんだ。山車のすそ幕に広告を入れたのを貯めると四年めに一回分の製作費が出てくる。そのワクを増やすのには、町内の消防とえんぶりと三社祭を支えている義勇消防以来の組織である「和合組」が「類家町に負けるな」と組員全員四十八人が「万円ずつ出し四十八万円を集めた。山車の曳き子も類家町の十分の五十人しかいないので「知り合いの子供をかてろ(参加させ

る)」とよその町内の知人宅に勧誘に出かけた。知人の冠婚葬祭には必ず顔を出し、盆正月には一杯飲んだ。そして頼んだ。

「祭りには必ずおらほの山車さかだれ」

「まるで市会議員の選挙運動だな」と笑われた。

その年から類家さん宅では母親のみつさん(五四)や奥さんのミヨさん(三三)も山車小屋に通いつめ、人形の衣裳を縫い、たき出しのむすびを握った。この年の山車は

「火事と喧嘩は江戸の華―め組の喧嘩」という題だった。め組のまとい持ちが中央の屋根の上にとっかち立ち、舞台では相撲取が荒れ回った。舞台そでに引き出しをとりつけ、回転させた。ワイド時代の先鞭をつけたのだ。だが、てつきり入ったと思ったこの山車も準優勝に止まった。最優秀賞は新顔の青年会議所がさらった。

がつくりきて翌四十九年は手を抜いて「えびす大黒」を出したらこれは秀作賞。

「お前は秀作の神様だ」と冷やかされた。

山車作り開眼
五十年に再び消防を主題に「江戸火消し」を出して準優勝賞の優秀賞をとった時類家さんははっと気づいた。

幅も高さも限られた山車の規格の中でまだ立体化、大型化の余地があったノ頂点に置かれる屋根や城などが省略できないため、山車の中央の主題部分にかくされてしまう。これを上を電線すれ以上にならざるを得ない。これを竹ザオを使用する際屋根を倒したり回転させる。横の回り舞台になる「引き出し」が山車前方にある運転手の頭越しに移動させていたのを下げ運転手の傍に平行に止める。これで上下左右に山車がぐんと拡大された。

また色彩はやたら豪華さをねらってキラビカビカさせていたが、ここ三三三トツプに踊り出た青年会議所や八戸市役所の山車を研究してみると、美しい中にも色彩が落ちているのを発見した。色を暗く昔風の山車に近づけ、その上で明暗をくつきり浮き出しているのだ。

これだ！と手を打った。五十年は初の最優秀賞となった「連獅子」を製作したが、この仕掛けの全面的な改善と色彩の見直しで、夜眠る時間も惜しんで製作にとりついた。それにもう一つの気がかりは菊田さんの病気が重くなったことだ。

「菊田爺ちゃんの目の黒い内に 等賞を見せなくっちゃー」

これだった。この時類家さんの祭り開催前の一週間の睡眠時間は一週間でたった十時間。疲労が目がかすみ、歯ぐきが全部浮いて唇の回りははれ上った。クギを踏んだ両足の傷が化膿し歩けない。

優勝旗を飾った山車が町内に凱旋した時類家さんはびっこをひき乍ら菊田さんの家にかけた。

「爺ちゃん。等とったぞ！」

病床から菊田さんを背負ってきて山車の前に立った。

「しっかと、見てくれ！」

「おー、おー」

もう口がきけなくなった菊田さんは、口をあけ、目を細め、ただ涙、涙、涙だった。

優勝のかけに：

昭和五十二年、最優秀賞「新め組の喧嘩」塩町。

昭和五十三年、最優秀賞「新五人石橋」塩町。



この年類家さんの祖母はなさんが八十七才だった。

「祖母ちゃんに三連勝の山車を見せてやりたい」

山車作りにかける執念はただこれだった。三度目の優勝旗を立てた山車が町内の道路いっぱいにあふれるようにして帰還してきた夜、類家さんはこんどはなさんを背負って山車見物させた。

「どうだ、祖母ちゃん？」

視力の薄れたはなさんはただ前方の華やかな輝きにひたすら顔を向けるばかりであった。傍に立っていた父親幸之助さん(六一)がこの時はじめて息子の山車について九年目だった。語批評した。

「これだば、良い」

祖母はなさんは二十日後の九月初めに世を去った。

類家さんは今、十年目の、そして自分の人生にとっては最後の山車作りに燃えている。

「商賈の広告看板も今年は十年目。この辺で身を入れなくては。それにこの十年というもの子供達と旅行も海水浴もしたことがなかった。本当は三連勝した昨年でやめるつもりだったんですが、どうしてもやりとげたことができませんでした」

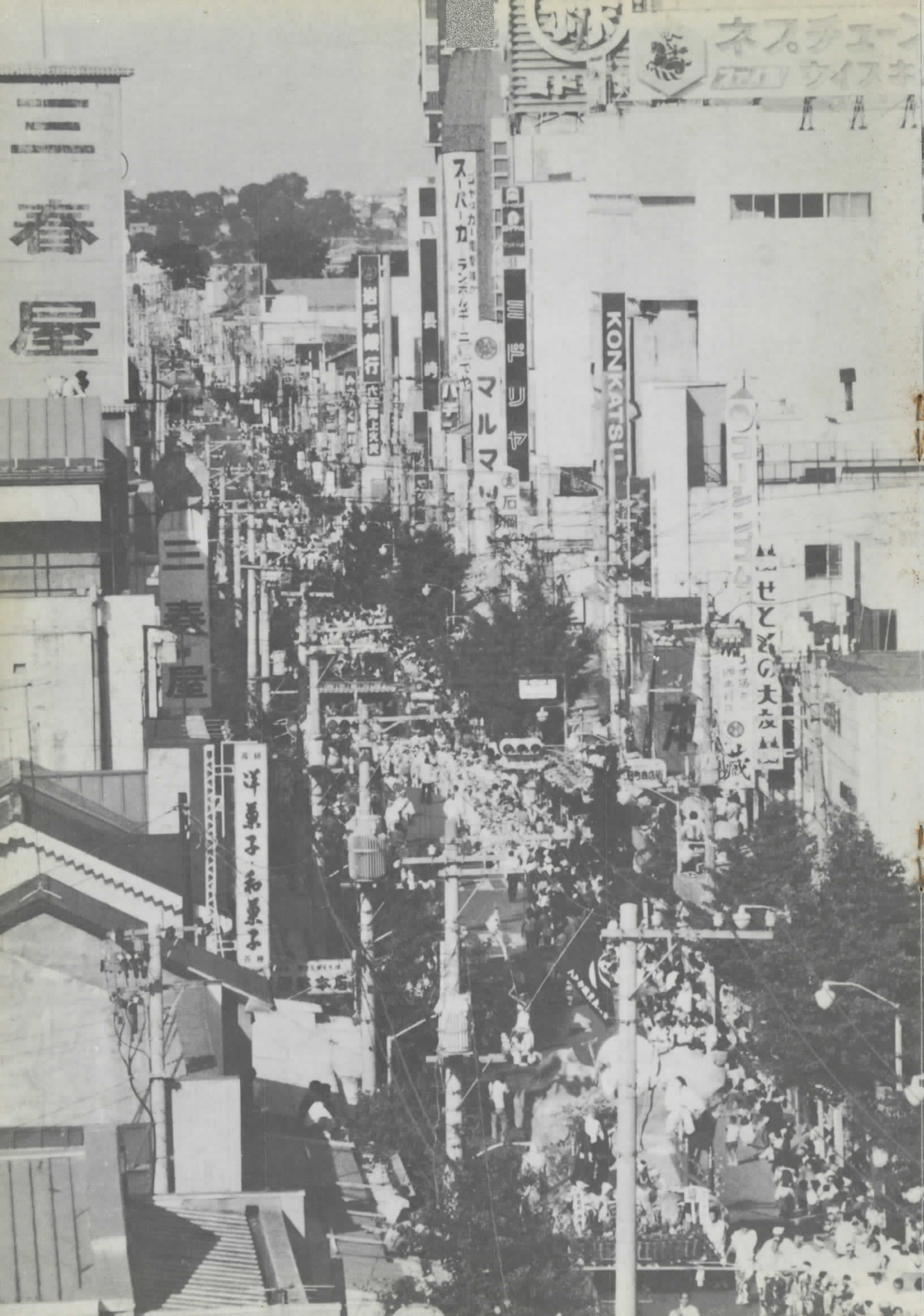
それは一今年の塩町の山車は八戸市制施行五〇周年にちなんで「南部俵積み」と決まったが、めでたい七福神を主題にした慶祝の晴れ舞台の中に、翁(おきな) 媼(おうな)を登場させ、千代万歳を祝うという趣意を加えるのである。

その翁が今は亡き菊田重次郎さん。媼が祖母はなさんという訳である。

「祭りバカも極まった、と笑われますかな」と類家さんは笑うのだが…。

▼母のみつさんも人形の着付けにけんめい(右下)







虎舞

虎のぬいぐるみの中の二人と、さき
らを鳴らしてたわむれる子供の軽快で
ユーモラスな舞いである。虎舞いは、
鯨の神楽のレパトリイの一つ加藤清
正の虎退治を舞踊化したもので、文政
8年（一八二四）から参加している。



神楽ばやし

祭りは神楽が露払いをする。トッテ
ン ラクラク……そのはやしがなんと
もいえない。南部神楽は八戸藩が守護
神として法霊大神を崇敬していたので、
享保6年（一七二一）この祭が執行さ
れた時から奉納されている。





山車曳き

祭りはこどもが主役だ。大きな山車に太い綱をつけて町中を曳いてゆくのがこのこども達。多い町内では四百人も揃う。それが歓声をあげて曳いてくるが、町をすぎてもまだ山車の姿が見えないというところもある。



武者行列

武者行列は文政年間八戸藩の藩政改革に着手した野村軍記が、藩財政の建て直しはまず藩士の文武精進からと、文政8年(一八二五)藩軍備一の年十騎の到着をもって長者山新羅神社へ行列参拝を行ったことが起因となっている。





娘
 三社祭に芸者さんが参加したのは古
 いが、代の移り変りで、より艶やかに
 祭りに色をそえてくれるようになった
 のが八戸娘の参加。花笠を背負い山車
 をひく娘。辰巳芸者風のあで姿。中
 は片肌抜いでの太鼓打ちと多彩。



子供
 三社祭はこども抜きには考えられな
 い。一年間待ちに待った祭り太鼓が鳴
 り出せば、どの家からも飛び出してく
 るこどもたち。揃いの半てんにはち巻
 き姿でおらが町内の山車を曳いて一日
 中「ヤレヤレ、ヤレヤレ」





太鼓

三社祭りのはやしは優雅な「祇園はやし」だ。大太鼓が一人、こどもの小太鼓が五人。それに笛。あの独特のリズムが聞こえてくれば八戸っ子たるものじっとしておれる訳はない。こどもの時から胸をとどろかせたあの太鼓の響きは生涯を通してふるさとのリズムとして心からきえることはない。



見物人

みこしと山車の合同運行の日は沿道の家々は早朝から窓を外して待っている。近在や他町村からやってきた見物客も朝から道路わきに座り込み。陽に照らされ、長時間待たされても、八戸三社祭りは見る価値があるのだ。

